

ダニエルの書 - 第二百番

預言の展開：アドベンチスト終末論における第二の集結とその意義

Jeff Pippenger

2024-05-05

私たちは、預言者イザヤによって、そしてその後ホワイト夫人によっても示された、第二の集めとして表されている預言的期間を検討しています。

その日、エッセイの根が立ち上がり、もろもろの民の旗印として立つ。異邦人はそれを求め、その安息は栄光に満ちる。その日が来ると、主はふたたび御手を伸ばし、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シナル、ハマテ、そして海の島々から、残されたご自分の民の残りの者を取り戻される。主は諸国のために旗印を掲げ、イスラエルの追い散らされた者を集め、ユダの散らされた者を地の四方から一つに集められる。エフライムのねたみは去り、ユダの敵は断たれる。エフライムはユダをねたまず、ユダはエフライムを悩ますことはない。イザヤ書 11:10-13.

神の終末の民が再び集められるとき、五旬節に先立つ十日間によって象徴されていた弟子たちの間の一致が生じ、それはイザヤが次のように述べる時として言及している。「エフライムのねたみも去り、ユダの敵対者は断たれる。エフライムはユダをねたまず、ユダはエフライムを悩ませない。」

神の民には試練が臨み、毒麦は小麦からより分けられる。しかし、エフライムはもはやユダをねたんではならず、ユダもまた、もはやエフライムを悩ますことはない。親切で、優しく、憐れみ深い言葉が、聖められた心と唇からあふれ出るだろう。私たちが一致することは不可欠であり、もし皆がキリストの柔和とへりくだりを求めるなら、私たちはキリストの思いを抱き、霊の一致がもたらされるだろう。Review and Herald, 1895年3月19日.

一致は、キリストが二度目に十四万四千人を集めるときに成し遂げる働きの一要素である。その一致は、ペンテコステに至る十日間とエクセターのキャンプ集会の六日間によって象徴されていた。また、1844年10月22日の大失望を経験した人々が道に迷わなかったなら、1856年から1863年にかけてそれは成就し得たであろう。

しかし、その失望に続く疑いと不確かさの時期に、多くの再臨信徒は信仰を捨ててしまった。不和と分裂が生じた。……こうして、働きは妨げられ、世界は暗闇の中に置かれた。もしアドベンチスト全体が神の戒めとイエスの信仰に立って一つとなっていたなら、私たちの歴史はどんなに違っていたことだろうか！

このようにキリストの到来が遅らされることは神の御心ではなかった。神は、ご自分の民イスラエルが荒野で四十年さまようことをお定めになったのではなかった。神は彼らを直ちにカナンへの地へ導き、そこで彼らを聖く、健やかで、幸いな民として打ち立てると約束された。しかし、その福音が最初に宣べ伝えられた人々は、「不信仰のゆえに」入らなかった（ヘブライ人への手紙3章19節）。彼らの心はつぶやきと反逆と憎しみで満ちており、神は彼らと結んだ契約を成就することができなかった。

不信、不平、反逆のゆえに、古代イスラエルは四十年間カナンの地に入ることを閉ざされた。同じ罪が、現代のイスラエルが天のカナンに入るのを遅らせてきた。どちらの場合にも、神の約束に落ち度があったのではない。主を名のる民の間にある不信、世俗的な心、献身の欠如、そして争いこそが、私たちを罪と悲しみのこの世にこれほど長い年月とどめてきたのである。『セレクトッド・メッセージ』第1巻、68、69。

第二の天使の降臨は、最初の失望において生じ、待ちの時を開始させた離散を明らかにし、その後、エクセターのキャンプ集会での六日間へとつながった。そこでは、集会の終わりに『真夜中の叫び』のメッセージにおいて聖霊が注がれることに先立って、そのメッセージにおける一致が成し遂げられた。

1844年10月22日の第三の天使の降臨は、大失望の際の散らしを示し、至聖所に関わる真理が神の民に開かれる中で、教育の期間へと導いた。1849年までには、主は御手を伸ばしてご自分の民をふたたび集めようとしておられ、1851年までには、1850年の図表が提示されていた。その図表は土台となるメッセージを表しており、世界の前に旗印として掲げられるべき、まさにそのメッセージであった。

キリストによる弟子たちの二度目の召集は、主のご降臨の直後に始まり、エクセターの人々の召集は「待機の時」の期間中に始まった。1863年の反逆の歴史においては、その二度目の召集は、1844年に聖所の光が開かれたときに始まった教育過程の開始から少なくとも5年後に始まった。1848年には、イスラム教が諸国を怒らせていた。第二の召集は、ペンテコステに先立つ10日間が到来することによって、またエクセターのキャンプ集会の6日間によって成し遂げられる漸進的な働きとして表されており、1856年までには完了しているべきであった。

御自分の民を再び集める働きは、第三の天使の働きの締めくくりであり、それはキリストの御手によって成し遂げられる。

そして安息日が来ると、彼は会堂で教え始めた。彼の話聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人はこれらのことをどこから得たのか。何という知恵がこの人に与えられているのか。しかも、このような力あるわざが彼の手によって行われるとは。」マルコ 6:2。

神のしるしが降臨するときに起こる離散は、試練の過程を開始し、最終的に二種類の礼拝者をあらわにし、そうして神殿を清める。

その方は手に箕を持ち、自分の脱穀場を徹底的にきれいにし、自分の麦を集めて倉に納めるが、もみ殻は消えることのない火で焼き尽くす。マタイによる福音書 3:12

その時期には、神の民は天使の手からそのメッセージを受け取り、それを食べることになっている。

また私は、別の力強い御使いが雲をまとい、天から降りて来るのを見た。彼の頭の上には虹があり、その顔は太陽のようで、その足は火の柱のようであった。彼の手には開かれた小さな巻物があり、右の足を海の上に、左の足を地の上に置いた。ヨハネの黙示録 10:1、2。

1844年4月19日に第二の天使が到来したとき、神の民は散らされた。彼らは、1840年8月11日に黙示録9章15節の預言が成就したことによって当初は集められていたが、主は、図表にあるいくつかの数値の計算の誤りを御手で覆っておられた。

私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、変更してはならないこと、また、数字は主が望まれたとおりであったこと、さらに、御手がある数字の上を覆っていくつかの数字の中にある一つの誤りを隠し、御手が取り去られるまで誰にもそれが見えなかったことを見た。『初期の著作』74頁。

御手が取り去られたことによって、サミュエル・スノーは遅れていた幻に関する正しい期日を特定することができた。

「主がなぜおいでにならなかったのかを理解できずに失望した忠実な人々は、闇の中に見捨てられたのではなかった。彼らは再び聖書へと導かれ、予言の期間を調べた。主の御手はその数字から取り去られ、誤りは明らかにされた。彼らは、予言の期間が1844年にまで及ぶこと、そして予言の期間が1843年に終わることを示すために自分たちが提示していたのと同じ証拠が、むしろそれが1844年に終わることを証明しているのを見た。」『初期の著作』237ページ。

第一と第二の天使の歴史には、キリストの御手に関わる道標の連なりが含まれている。1840年8月11日と1844年4月19日に主が降りて来られたとき、御手にはメッセージを携えておられた。1842年5月に1843年の図表を作成し出版するよう導いたのは主の御手であった。図表の数字の誤りを封じられたのも主の御手であった。その最初の失望によって人々が散らされた後、エレミヤはキリストの御手のゆえに独りで座していた。その後、主は御手を取り去られ、こうして「真夜中の叫び」のメッセージの封印を解かれた。御民を二度目に集めるために御手を差し伸べられたその行為は、最初の失望からエクセターのキャンプ集會に至るまでの間に起こり、ちょうど聖霊の注ぎが下る前に弟子たちが最終的にエルサレムで十日間一つ所に集められたようであった。1844年10月22日に第三天使が到来したとき、主は御手を掲げられた。

また、私が海の上と地の上に立っているのを見た御使いは、天に向かって手を上げ、とこしえに生きておられる方、すなわち天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを創造された方にかけて誓った。「もはや時はない。」黙示録 10:5, 6。

1840年8月11日の最初の集會から1844年10月22日まで、第一と第二の天使の歴史はキリストの御手によって刻印された。1844年10月22日、第三の天使が降臨し、ミラー派の小さな群れは大失望によって散り散りになった。その日にキリストは御手を天に挙げ、もはや時はないと誓われた。

1844年から1863年に至る歴史における第二の集めは、キリストが御手を挙げ、しかもその御手に食べるべきメッセージを持っておられることから始まった。続いて1849年に、彼は散らされたご自分の民を集めるために二度目に御手を差し伸べられた。彼らは真夜中の叫びのメッセージによって集められたが、予告された出来事が起こらなかったときに散らされた。エクセターのキャンプ集會で、キリストはご自分の群れを集め、メッセージにおいて彼らを一致させた。それは、ペンテコステに先立つ十日間にそうされたのと同じで

あった。フィラデルフィアのミラー派はエクセターのキャンプ集会を後にし、ペンテコステを再現した。1856年には、ラオデキアへと移行してしまったその運動の外にキリストはおられた。というのも、キリストはラオデキア人の心の外に立って戸を叩き、入ることを求めておられるからである。

見よ、私は戸の外に立って叩いている。だれでも私の声を聞いて戸を開けるなら、私はその人のところに入って、彼と共に食事をし、彼もまた私と共に食事をする。ヨハネの黙示録 3:20

1856年、キリストの御手はラオデキア的なミラー派運動の戸を叩いていたが、むなしかった。その7年前の1849年には、彼は二度目にご自分の民を集め始めていたが、疑いと不確かさがフィラデルフィア派運動を阻んだ。

もしアドベンチストたちが、1844年の大失望の後も信仰を堅く保ち、神の開かれる摂理に一致して前進し、第三天使のメッセージを受け入れ、聖霊の力によってそれを世に宣べ伝えていたなら、彼らは神の救いを目の当たりにし、主は彼らの努力とともに力強く働かれ、働きは完成し、キリストはすでに、御自分の民をその報いにあずからせるためにお迎えに来られていたであろう。しかし、その失望に続く疑いと不確かさの時期に、多くの再臨信徒がその信仰を捨ててしまった……。このようにして働きは妨げられ、世界は暗闇の中に残された。もしアドベンチストの全体が神の戒めとイエスの信仰に団結していたなら、私たちの歴史はどれほど大きく違っていたことであろうか！ Evangelism, 695.

2001年9月11日、キリストは終わりの日の民を集め、その後、彼らは2020年7月18日に散らされた。2001年9月11日、集められた者たちはキリストの御手から隠された書を取って食べた。2020年7月18日、彼らは挙げられた御手によって示されていた、「時はもはやない」と告げる命令を退けた。

フィラデルフィアのミラー派は、1843年の誤った予言においても反逆を示さなかった。彼らは主が啓示されたすべての光に基づいて行動していたからである。しかし、2020年7月18日には、第三の天使の運動のラオデキヤ人たちは、御手に伴う光に対して反逆した。1844年以後、第一の天使のフィラデルフィア運動は、「疑いと不確かさの時期」に「信仰を手放し」、ラオデキヤ人となった。

1856年はその転換点を表し、終わりの時代の神の民にとっての転換点を象徴している。

1849年から1856年までの7年間のどこかで、フィラデルフィアのミラー派運動は、主がご自身の民を再び集めるために差し伸べておられた御手に逆らい、また、その時には過去になされた以上のことをなさるとの約束があった。

9月23日、主は、御自分の民の残りの者を取り戻すために二度目に御手を伸ばされたこと、また、この集めの時には努力を倍加しなければならないことを私に示された。散らしの時にはイスラエルは打たれ、引き裂かれた。しかし今や集めの時には、神はその民を癒し、傷を包んでくださる。散らしの時には、真理を広めるために払われた努力はほとんど効果がなく、ほとんど、あるいは全く何も成し遂げられなかった。しかし、神がご自分の民を集めるべく御手を伸ばされた集めの時には、真理を広める努

力は所期の効果を上げるであろう。皆が一致し、この働きに熱心であるべきである。いま、集めの時にある私たちを律する手本として散らしの時を引き合いに出すのは、誰にとっても恥ずべきことだと私は見た。というのは、もし神が今、当時なされた以上のことを私たちのためになさらないなら、イスラエルは決して集められはしないからである。真理は説教されるのと同じくらい、紙上において公にされることも必要である。Review and Herald, 1850年11月1日。

明らかに、主はご自身の御業を一致のうちに前進させようとされた。しかし、その一致は明らかに崩れ、「失望に続く疑いと不確実の時期に、多くの再臨信徒が信仰を捨てた。」The Present Truth (のちに Review and Herald) 誌は1849年に刊行が始まり、1851年までには1850年の図表が入手できるようになっていたが、1856年までには、レビ記26章の「七つの時」のメッセージは未完のまま残された。1844年10月22日に封印が解かれたそのメッセージは、二千三百年と二千五百二十年の時の預言が満了したときに起こった。

当時、安息日は他の教義にまさって輝いた教義であり、やがて最後の試みが1856年に到来するまで、十二年間にわたって試みの過程が進んだ。その試みは土地のための安息に関するものであり、それは人のための安息から始まった試みの過程に終止符を打った。この試みの期間はアルファとオメガの印を帯びていた。1856年はまた、ミラーが見出した最初の基礎的真理に関する知識の増加をも表しており、その水準においてもまたアルファとオメガの印を帯びていた。神に聖別された民のしるしである安息日の真理は、第七のラッパが吹き鳴らされることとして表されており、そのとき、信者のうちにおられるキリスト、すなわち栄光の望みという奥義が成就する。「七つの時」は、贖罪日に吹き鳴らされるべきヨベルの角笛によって表された。

1856年から1863年までの七年間は、弟子たちにとってのエルサレムでの十日間、そしてフィラデルフィア派ミラライトにとってのエクセター・キャンプミーティングの六日間を表していたが、残念ながらその期間は、主が彼らを過渡期を通して導かれるときに従うことを拒む者たちの例証となってしまった。七つの雷鳴の歴史的時期に当たる第一と第二の天使の歴史は、主が1844年4月19日から御自分の民を二度目に集めるために御手を差し伸べられたことを示すとともに、賢い者たちがキリストに従って至聖所へ入ったように、その従順な応答をも描いている。

第一のカデシュの歴史、すなわち1844年から1863年に至る第三の天使の歴史は、主が再び御手を伸ばしてその民を二度目に集めようとしておられることを示している。しかし、その歴史においては反逆が現れた。今や、2023年7月以来、三度目に、主は再び御手を伸ばしてその民を二度目に集めようとしておられ、彼らは従順なフィラデルフィア人として第二のカデシュを成就するであろう。というのも、真理の印が、三つの時を、初めと終わりには従順なフィラデルフィア人を表し、その中間の例は不従順なラオデキア人である、と示しているからである。

次回の記事でこの研究を続けます。

諸教会はラオデキヤ人へのメッセージに耳を傾けるだろうか。彼らは悔い改めるのか。それとも、真理の最も厳粛なメッセージ—第三天使のメッセージ—が世に宣べ伝えられているにもかかわらず、罪のうちに歩み続けるのか。これは墮落した世への最後の

あわれみのメッセージ、最後の警告である。もし神の教会がなまぬるくなるなら、倒れ、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣、また、あらゆる汚れて憎むべき鳥の檻となったと描写されている諸教会と同様に、神の御前に受け入れられない。真理を聞き受け入れる機会が与えられ、セブンスデー・アドベンチスト教会に加わり、自らを神の戒めを守る民と称しながらも、名ばかりの教会以上の生命力も神への献身も持たない者たちは、神の律法に反対する教会と同様に、確かに神の災いを受けることになる。真理によって聖められた者だけが、キリストがご自身を愛しその戒めを守る者たちのために備えに行かれた天の住まいにおいて、王家を構成するのである。

「『彼を知っていると言いながら、その戒めを守らない者は偽り者であり、その人のうちには真理はない』[ヨハネの第一の手紙 2:4]. これは、神を知り、その戒めを守っていると主張しながら、善行によってそれを示さないすべての者を含む。彼らはその行いに応じて報いを受けるであろう。『彼のうちにとどまる者は罪を犯さない。罪を犯す者は、彼を見たこともなく、また彼を知らない』[ヨハネの第一の手紙 3:6]. これは、セブンスデー・アドベンチストの教会員を含む、すべての教会員に向けられている。『子たちよ、誰にも欺かれてはならない。義を行う者は義人である。彼が義であるように、その者も義である。罪を犯す者は悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。このために神の御子が現れた。悪魔のわざを打ち壊すためである。神から生まれた者はだれでも罪を犯さない。神の種がその人のうちにとどまっているからである。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができない。これによって、神の子らと悪魔の子らが明らかになる。義を行わない者は神からの者ではなく、兄弟を愛さない者も同様である』[ヨハネの第一の手紙 3:7-10].」

安息日を守るアドベンチストであると主張しながら、なお罪にとどまっている者は皆、神の御前では偽り者である。彼らの罪深い歩みは、神の働きに逆行している。彼らは他の人々をも罪に引き入れている。神の御言葉が、私たちの教会のすべての会員に向けて、こう語っている。「あなたがたの足のために、まっすぐな道を作りなさい。なえているものが道からそれてしまわないように、むしろ癒やされるように。すべての人との平和を追い求め、また聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることはできない。よく気をつけて、だれも神の恵みに達しそこなうことのないように。また、苦い根が芽を出してあなたがたを悩ませ、そのために多くの人汚されることのないように。また、一杯の食物のために長子の権利を売ったエサウのような、不品行な者や俗悪な者がだれ一人としていないように。あなたがたが知っているとおりに、その後、彼が祝福を受け継ごうとしたとき、彼は退けられた。涙を流して熱心に求めたのに、悔い改めの機会を見いだすことができなかった。」[ヘブル人への手紙 12:13-17]

これは、真理を信じると主張する多くの者に当てはまる。情欲的な行いを捨てるのではなく、彼らはサタンの人を欺く詭弁のもとで、誤った教育の道へあえて踏み出していく。罪は罪として見分けられない。彼らの良心そのものが汚され、心は墮落し、思いに至るまで絶えず腐敗している。サタンは彼らをおとりとして用い、全存在を汚す不潔な行いへと魂を誘い込む。「モーセの律法[それは神の律法であった]を侮った者は、二人または三人の証人の証言によって、あわれみなく死んだ。では、神の御子を踏みにじり、自分がそのゆえに聖別された契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮辱した者は、どれほどもっと重い罰に値するとあなたがたは思うか。わたした

ちはこう言われた方を知っている。「復讐はわたしのすること、わたしが報いる」と主は言われた。さらにまた、「主はご自分の民をさばかれる」。生ける神の御手のうちに落ちるのは、恐ろしいことである」 [Hebrews 10:28-31] . Manuscript Releases、第19巻、176、177.